

## 歌学的ナショナリズムのメディア論——『原理日本』再考

佐藤 卓己

はじめに

『原理日本』は、昭和戦前を代表するファシスト思想家・養田胸喜の「悪名」とともに、その「紙製凶器」として名高い。だが、その知名度の割に、『原理日本』自体を手にした者は多くはあるまい。特に戦後はその悪名の高さゆえ、手にすることさえ憚る風潮が存在したことも否定できない。それ以上に、ジャーナリズム史研究の戦後パラダイムの中で忘却されてきた雑誌である。ほとんどの研究者は「なぜファシズムを阻止できなかったか」という問題意識から、戦時下のメディアを考察してきた。その結果、もっぱら左翼ジャーナリズムの抵抗とそれに対する当局の弾圧が中心的な研究対象となってきた。左翼雑誌はどんな少数数のものでも復刻され、研究が蓄積されたが、他方でファシズム化を推進したとされる右翼雑誌につい

ての学問的関心は乏しく組織的な保存や収集は行われてこなかった。

一九三〇年代の知識人弾圧事件—京大瀧川事件、美濃部天皇機関説事件、河合栄治郎や津田左右吉の著書発禁事件など—で起爆剤の役割を果たした『原理日本』の分析は、ファシズム研究に不可欠のはずである<sup>1)</sup>。しかし、その『原理日本』でさえ、全巻を閲覧できる図書館は現存しない<sup>2)</sup>。それでも所蔵先が確認できる『原理日本』は例外的で、その同人が寄稿した新聞『日本』、『帝国新報』などは他の右翼メディアと同様、その書誌情報の確認さえ容易ではない。

「被害者」の立場に立った、安全にして「政治的に正しい」ファシズム研究を乗り越えるためには、右翼メディアの本格的な研究を避けて通ることはできないはずである。

## 一、ラジオ時代の「右翼雑誌」——二つの創刊年

『原理日本』は、一九二五年一月七日に創刊された月刊雑誌（菊判三八頁・定価二十銭）である。<sup>(3)</sup>同年一月一日付で第三種郵便物の認可を受けている。この一九二五年は、普通選挙法が成立した大衆民主主義の元年であり、またラジオ放送開始にもなるマス・メディア発展史の画期でもある。<sup>(4)</sup>このラジオというマス・メディアの黄金時代、すなわち一九三〇年代から一九四〇年代は、「ファシズムの時代」とも呼ばれている。実際、日本におけるラジオ史研究は広義のファシズム研究であったといっても過言ではない。<sup>(5)</sup>

そうした「ファシスト的メディア」としての先入観のため、ラジオのメディア特性は「活字の市民性・理性」に対する「電波の大衆性・感性」として枠付けられてきた。こうしたメディア論的発想は、やはり同じ一九二五年の新年号を創刊とする『キング』（大日本雄弁会講談社）のような「百万雑誌」にも適合的である。しかし、後述するように少数で圧倒的にインテリ向けだった『原理日本』のような右翼雑誌には、一見したところ適応しないように思える。つまり、形式的に見れば『原理日本』は読者が潜在的な執筆者である「同人雑誌」であった。その意味で、『原理日本』は雑誌メディアの最も古典的、市民的スタイルである。以下では、それにもかかわら

ず、『原理日本』がラジオ時代の雑誌であることを明らかにしたい。それは、受信機に特化したマス・メディアとしてのラジオが普及する以前の無線電話装置、双方向性を維持した「コミュニケーション装置としてのラジオ」（ベルトルト・ブレヒト）をイメージすれば判りやすい。<sup>(6)</sup>以下ではラジオ時代の右翼運動メディアとして、『原理日本』のメディア特性を考察したい。

### 出版法と新聞法

創刊号（一九二五年一月号）の表紙は「社会・歴史・精神・文化科学的研究・批判」、「凝固革命思想対不断思想學術改革機関雑誌」と銘打たれ、奥付には編輯者・蓑田胸喜・吉田要三、印刷者・宮尾担、発行所・文省社と記載されている。しかし、第二号（同年一月号）では編輯者から吉田要三が消え、発行所・原理日本社、発売所・文省社となった。さらに第四号（一九二六年二月号）から文省社とも決別して発行・発売とも原理日本社が行っている。なお、原理日本社（創刊号は『原理日本』編輯所）は、第三五号（一九二九年二月号）まで蓑田胸喜の自宅である。

創刊号には「宣言」、「綱領」が掲げられているが、「綱領」は第二二号（一九二七年一月号）で第三段落の改訂が告知されている。『原理日本』の思想的系譜を知る上で重要であり、改訂での削除部分と（加筆部分）を以下に示しておきたい。

「われらはかくの如き意味に於ける日本文化史上の思想的偉人戦士として、それ故祖国祖国守護のうつき神霊として、聖徳太子・人麿・実朝・親鸞・〔愚管抄著者・〕素行〔・松蔭・〕近くは井上毅・正岡子規等を顧み、また畏かれど明治天皇を仰ぎまつるのである。〔また〕道元・日蓮・芭蕉・宣長〔・福沢諭吉〕等は積極的極的以外の要素の内的純化に最後の一線に於て、日本的に缺くべきものを認めしむるも、猶われれを顧みせしむるものがあつた。〔をも〕顧みるのであるが、それら諸々の祖先の思想精神は畏かれども明治天皇の御製にあます所なくすべをさめられを信する。われらは「明治天皇御集」を拜誦して進まんとするものである。」また〔なほ〕近く高山樗牛と岩野泡鳴とは『日本主義』の名の下に戦ひ斃れし先駆同志として大須賀乙字、大津康と共に、いまわれらが新たにこのいとなみを始むるに当つて悲しき心を以て追懐する所である。」

なお、第二二号「編輯消息」では公表されていないが、「宣言」末尾も同時に若干の改訂がほどこされている。

「あゝ、同胞よ！ 世界は祖國のこの浮脂の如くして漂へる今の世のさまに憤ろしき心をいだきせひそみ〔て〕もだへつゝある同胞よ！ 未来疑惧の理知を奮進の情意〔のうち〕に忘却せしめず〔よ、同胞よ！〕、今われらもともに立ちいで、祖國日本につかへようではないか！〔今たゞちに！〕」

「宣言」、「綱領」の改訂部分からも、後述する原理日本社の「歌学的」日本主義は明らかだが、それは単に伝統主義的な日本主義とは異なっている。創刊号から第二五号（一九二八年三月号）までタイトル下には「知識は世界に・情意は祖國に」とスローガンが掲げられているが、第一次世界大戦後における思想のグローバル化、すなわちアメリカニズムとマルクス主義の浸透を強く意識した「新しいナショナリズム」と言うべきであろう。

一般に「右翼雑誌」と分類される『原理日本』だが、この創刊段階では時事的記事の掲載が可能な新聞紙法における時局雑誌ではなく、出版法の下で発行された「学術雑誌」である。表紙のスローガン「知識は世界に・情意は祖國に」は第一八号（一九二七年六月号）から第二一号（同年一〇月号）、第二六号（一九二八年四月号）から第二八号（同年六月号）で「全国民と祖國永久生命とのために」となり、第二九号（同年六月臨時増刊号）以後「攻勢的進出号」に変わり、第三二号（同年九月号）で「祖國防護思想戦線」、第三三号（同年一二月号）で「政治思想芸術的国防戦線」となる。このスローガンの変遷には、『原理日本』というメディアの「政治化」プロセスが色濃く反映している。

「政治的右翼雑誌」としての『原理日本』は、法的には第三二号（一九二八年一〇月号）九月一五日印刷納本、一〇月一日発行）から始まる。実際、内務省警保局『出版警察法概観』など当局の右翼

新聞雑誌リストで、『原理日本』は「昭和三年九月一日創刊、月一回」と記されている。つまり、政治・経済を批評することができると新聞紙法登録となった第三号から「右翼雑誌」となったわけである。同号の表紙には、「本号より新聞法により発行」と大書されている。こうした雑誌の登録変更は、とくに珍しくはない。有名なところでは、一九二三年一月に菊池寛が創刊した文芸雑誌『文芸春秋』も、一九二六年九月号から時事的内容も扱うべく出版法から新聞紙法に登録変更し総合雑誌化している。

それでは新聞紙法下の『原理日本』を、内務省警保局はどのように把握していただろうか。「純正日本主義系」、「国家社会主義系」、「農本自治主義系」の三系統に分類された右翼雑誌のなかで、『原理日本』は純正日本主義系とされている。

「本誌は『しきしまの道会』の機関紙にして『しきしまのみち』精神の徹底普及、皇室中心主義敬神尊皇を主唱し、蓑田胸喜、三井甲之、松田福松等が中心となり専ら民主的凶逆思想、機関説撲滅に力を注ぎ、殆ど毎号帝大教授等の諸説を反駁する論説を掲げてゐる。」

これは『昭和一〇年中に於ける出版警察概観』の記述だが、警保局の見方も少しづつ変化している。『昭和七年中に於ける出版警察概観』では「国粹主義の見地より政治その他を主として往々不穩なる記事を掲載することあり」と警戒的だが、『昭和八年中に於ける出版警察概観』では「処分を受けたることなし、発行確実」

と好意的な文言が加わっている<sup>9)</sup>。しかし、『原理日本』の発行は必ずしも「確実」ではない。全体で三五回の休刊があり、完全に毎月刊行されたのは一九四二年と一九四三年のみである。日米開戦によって『原理日本』の活発な言論批判活動が停滞した時期に、皮肉にも定期刊行が実現したことになる。逆に言えば、内務省警保局の「発行確実」という評価は、他の右翼雑誌で不定期的な発行が一般的であったことを示している。

## 二、「しきしまのみち」宣伝機関

『原理日本』を評価する上で重要なことは、「しきしまのみち」という歌学のイデオロギーである。第三号（一九二八年一〇月号）に掲載された『しきしまのみち会』宣言綱領会則」に明らかのように、原理日本社と不可分な同会は明治天皇御製朗誦を国民祭儀として普及されることを目的とした短歌結社である。さらに書誌学的には、『原理日本』は歌人・三井甲之（一八八三—一九五三）が主宰した『人生と表現』（前継誌『アカネ』の後継誌である。第九号（一九三五年九月号）で、三井は次のように宣言している。

「われわれは明治四十一年根岸短歌会の伝統を継承し、後人生と表現社、又原理日本と改称し、定期刊行物を発行しつゝ今日に及ぶまで二八年間、シキシマノミチの伝統を守り、文献としての客観的

対象に研究方法論として論理的批判を加へ芸術的表現、文明批評、時事評論に分化する作業を、畏くも『明治天皇御製』拝誦の国民的宗教儀礼によつて綜合統一すべしと信じ、また行ひつゝあるのである。」

三井は東京帝国大学文学部在学時から正岡子規が作った根岸短歌会に属した歌人である。同会機関誌『馬酔木』終刊の一九〇八年、伊藤左千夫は後継誌『アカネ』の編集を三井に委ねた。三井は『アカネ』の総合文芸誌化をめざし、西欧文芸の紹介にも紙幅をさいた。三井は、一方でゲーテやヴェントに傾倒し『ファウスト』や『民族心理学』の翻訳なども手がけている。やがて三井と伊藤の関係が決裂すると、旧『馬酔木』同人の多くは『アカネ』を離れて、別に『アラギ』を創刊する。一九一二年、三井は『アカネ』を『人生と表現』に改題した。『原理日本』は、こうした短歌雑誌の系譜に連なっている。

ただし、組織としての人生と表現社は原理日本社と並んで存在していた。人生と表現社の後継として、一九二八年八月に再結成された団体が「しきしまのみち会」である。『原理日本』第三四号（一九二九年一月号）の表紙には「しきしまのみち宣伝機関 政治思想芸術的国防戦線」と大書されている。

小松茂夫は大正末年から昭和期の代表的な日本主義者に、三井甲之、五百木良三（政教社）を挙げ、「歌学的日本主義」と名づけた。

小松によれば、明治二〇年代の政論的日本主義（陸実・三宅雄二郎・志賀重昂）、明治三〇年代の美学的日本主義（高山樗牛）に続いて登場した新しい日本主義が歌学的日本主義である。

「それらの形態をその政治的機能によつて性格づけると、それぞれ保守的、反動的、革命的として性格づけることができるであろう。最後に「思想原理」としての「日本」の内容に即してみると、「日本」観念は世俗的日本から神秘的日本へと転移しているということができよう（近代日本の理性喪失の過程を象徴しているではないか！）。」

「近代日本の理性喪失の過程」と判断するかどうかは別として、歌学的日本主義の典型として三井甲之が挙げられていることは重要である。蓑田胸喜も「人生観入信—読書自伝の一齣」（『読書人』一九四二年八月号）で、一九一八年に三井が『日本及日本人』に発表した長詩「祖国礼拝」「祖国主義」こそ「原理日本」の原点であると証言している。確かに、「原理日本」という言葉は、『日本及日本人』一九一八年一月号掲載の「祖国礼拝」に登場している。全九連の冒頭と末尾を引用しておきたい。

「友よ、はらからよ、さきのみかどのかむあがりましましよとき  
暗やみにわれらまだへりき。そのやみのなかに一すぢの光は無  
限の時を貫きさまよへる

此の光をすぶべき原理は『日本』なりき。

(中略)

天上の極樂は内心に、瞑想の觀念は現実に、日本の地に日本のことばに われらの行ひに 今うたば吉らしと 不斷の準備と覺悟と 組織と秩序と訓練と そを内に統ぶる

国民宗教原理『日本』。ああ、日本よ、五官と思想との現實的対象日本よ。ああ、祖国日本よ。われらは祖国日本を礼拝す。」

こうした三井の歌学的日本主義、すなわち「シキシマノミチ」に惹きつけられたのが、当時帝大学生であった養田をはじめとする後の『原理日本』同人たちであり、彼らは短歌を共通の文化的背景としていた。『原理日本』には多くの詩歌が収録されているが、歌稿送付先は養田の編輯部ではなかった。当初は人生と表現社同人・田代順一が選者となったが、田代の病氣(第五二号―一九三〇年九月号「しきしまのみちの戦士 田代順一追悼号」を参照)により第四七号(一九三〇年三月号)から三井甲之自らが選者として詩歌欄の編輯を行った。主筆の養田も歌稿を田代や三井のもとに送っていたわけである。つまり、『原理日本』の精神的中心にあったのは、三井の歌学といえる。

そうであれば、一九三九年、養田や三井によって開始された津田左右吉攻撃の核心が「語り部」抹殺、すなわち言霊の否定に対する反発であったという川村湊の指摘もうなずける。こうした原理日本社の激的な表現活動の底流には、その源流である根岸短歌会の創設

者・正岡子規が唱えた「短歌滅亡」への危機意識が存在していたはずである。つまり、昭和期フアンシズムが自由主義的な活字教養を嫌悪した背景には、音声中心主義の伝統が存在したといえる。村井紀は「滅亡の言説空間」で短歌滅亡論とナショナリズムの関係をおおよそ以下のようにまとめている。

そもそも本居宣長など徳川期国学以来、儒教漢学の「漢意」に対する反発として「和歌」が称揚されてきた。とくに、国学では漢字の合理主義に対する音声言語、すなわち古代口語としての万葉集が対置され、漢文の日本書記よりもヤマトコトバの古事記が評価された。こうした流れは前島密「漢字御廃止之儀」(一八六六年)の例で明らかのように、文明開化期の言文一致運動にも流れ込んだ。言文一致の流れにおいて、文字数と言葉の組み合わせに限界がある短歌など定型詩の「滅亡」を予見したのが正岡子規であった。正岡は「歌よみに与ふる書」(一八八九年)で、技巧的な旧派短歌を批判して「革新」を唱えた。そうした危機意識の中で誕生した「近代短歌」結社が、根岸短歌会である。彼らが唱えた「写生」は、文人貴族の技巧を排して、庶民的で素朴な『万葉集』を模範とした。それは近代化の危機の中で国民的「伝統」を創造しようとする試みであった。一方、御歌所に結集する「旧派短歌」は、天皇儀礼創出の一貫として一八七九年歌会始めで「お題」による公募を開始した。天皇と国民を短歌という媒体(メディア)によって結合しようとする試み

である。象徴的なことだが、日韓併合の翌年一九一一年の歌会始めには新しい「国民」（韓国人）の短歌が採用されている。こうして、新聞雑誌など各種メディアには短歌欄が登場するようになり、正岡子規も一九〇〇年以來『日本』新聞で歌壇選者をつとめている。<sup>80</sup>

子規の根岸短歌会の『馬酔木』を継承して『アカネ』を主宰した三井も、『日本及日本人』の歌壇選者をつとめた。つまり、三井のシキシマノミチは、明治天皇御製拝誦を掲げることで、正岡子規の短歌革新と国民宗教を結合したといえる。「拝誦」という儀礼には、その音声中心主義が色濃く現れている。それは、「しきしまのみち 宣伝機関」原理日本社の昭和期における活動にも反映している。「文字」に対する「言葉」の優位を養田胸喜は「津田左右吉氏の神代史・上代史抹殺論批判」（第一三八号・一九三九年一月）で次のように述べている。

「文字よりも言葉が根源的で、言葉を話す人間精神の威神力を確認すべきである。津田氏の思想法の幼稚低級なる月次合理主義はいまや神話学民族心理学的に根本的無学を暴露したのである。」

こうした歌学的要素を見落として『原理日本』を理解することはできない。短歌欄「しきしまのみち」をもち、掲載論文の端々に明治天皇御製が登場する『原理日本』は、当時の右翼陣営においても「特異な存在」と目されていた。たとえば、帝国新報社編『非常時局に關ふ愛國陣営』（一九三六年）は、原理日本社を次のように紹

介している。

「原理日本社は愛國陣営に於ける特異的な存在である。思想雑誌『人生と表現』を主宰せる三井甲之氏に養田胸喜、松田福松氏等が中心となり（中略）帝大、一高、慶應等の求道心に燃ゆる学生諸君が集まつた。（中略）世界文化単位として確立せる「原理日本」を究明宣説し、内外一切の凶悪思想運動に対して永久思想戦を展開し以て内に国体明徴の徹底を図り外世界文化と人類生活の思想向上を図るに在り、之が為め傍系団体シキシマノミチ会とともに「明治天皇御製」の拝誦随順に只管精進するにある。全国各地各階層に熱烈なる社友を有し凡そ三千名と見られ、三井、養田、松田氏以下数十名の同人を動員すれば今日からでも直ちに純日本学派の綜合大学を建設し得る實力を有してゐる。」

以下で述べるように、『原理日本』の公表された発行部数が最大でも千五百部であった以上、「社友三千名」は誇張だが、右翼団体には珍しく購読者が高学歴層に偏していたことは明らかである。

読者層については、初期には誌友名簿や投書欄などから一定の情報が見られる。毎号の奥付で書店での購入よりも、直接購読の「誌友」制を繰り返し呼びかけている。実際、書店での直接購入が占める割合は極端に小さかつたはずである。以下のように突然書店扱いを中止することも、書店販売が少ないために出来たといえよう。

「尚ほ本誌二月、三月号は書店扱ひを中止致しましたので、この

方面の読者には少からず御迷惑をかけたことゝ存じます。」(第一四二号・一九四〇年四月号)

特に帝大教授糾弾を世論に訴えるキャンペーンのためには、同人向けの「しきしまのみち」欄がある『原理日本』本誌よりも、論文のみを編輯したパンフレットの方が適当かつ効果的であったはずである。ただし、論文の場合でも結語部分で明治天皇御製を引用する独特なスタイルは、一般読者には戸惑いを与えたと考えられる。今日、研究者が蕨田胸喜の文体に向き合うことを難しくしている一因でもある。たとえば、次のような文章である。

「祭政一致のカンナガラノミチはシキシマノミチの芸術に直接表現せらるゝのでありまして、本誌「しきしまのみち」欄の充実に溢流する戦闘と親愛と祈願と禊祓との生命の言葉は眠れる魂を呼びめさまさずにはおかぬのであります。」(第一三二号・一九三九年五月)

原理日本人たちの歌学世界は、当時も今も一般読者には敷居が高かったはずである。以下では、蕨田胸喜執筆の「編輯消息」を中心に『原理日本』の変遷を概観しておきたい。

### 三、『原理日本』の変遷

『原理日本』は、大きく創刊期・展開期・終刊期の三つの時期に分けて考えることができる。「創刊期」は出版法の下で創刊された

第一号から第三二号まで(一九二五年一月—一九二八年九月)、「展開期」は新聞紙法の下で時局批判を本格化した第三二号から日米開戦前の第一四九号まで(一九二八年一月—一九四一年一月)、「終刊期」は戦時体制が本格化する中で主要敵が国内から国外に移った第一五〇号から第一八五号終刊まで(一九四一年二月—一九四四年一月)である。正式な「終刊の辞」はないが、第一七二号(一九四二年二月号)「編輯消息」が蕨田の健康悪化を伝えており、編輯協力者の病気や学徒出陣のため第一八五号(一九四四年一月号)で発行が停止された。この終刊の半年後、一九四四年六月蕨田は熊本に疎開している。

『原理日本』が注目されたのは、第二期に展開期における帝大教授への糾弾活動である。しかし、一九三三年瀧川事件、一九三五年美濃部天皇機関説問題、一九三九年河合栄治郎批判、津田左右吉批判などは数多くの研究で言及されているので、以下では「創刊期」と「終刊期」に重点を置いて、書誌事項を中心に言及しておきたい。

#### ① 創刊期(第一号—第二二号)

一九二五年十二月号、すなわち創刊号「編輯消息」は、『原理日本』成立の経緯とその人脈を詳しく伝えている。

「本誌は、故大須賀乙字〔俳人〕、廣瀬哲士〔慶應義塾予科教授〕、川出麻須美〔第七高等学校教授〕、松本彦次郎〔第六高等学校教授〕、



小林澄兄（慶應義塾普通部教授）、船田三郎氏等との協力の下に三井甲之氏が発刊された『人生と表現』（明治四十一年二月創刊、大正八・九年時代は別に『親鸞と祖国』として刊行、同十年三月復活十二年八月以降休刊）の分化的発展として、高山樗牛、岩野泡鳴の『日本主義』運動の内的動機を継承し、『表現』休刊以来今日までの命脈を持続し来りつゝある井上右近（大谷大学教授）氏の『青人草』に策応し、時代の進展に応じて新しき形式と条件との下に広く全国民の間に同志を求めまたわれらの思想信念を伝へ、祖国の史的現実的永久生命に没しつゝ之を防護し発揚せんとするのである。それ故猶本誌は一時純学術雑誌の形式をとるが近き将来に於て紙面を拡大し新聞法によつて発行すべく準備中である。」

すでに述べたように、出版法下では「純学術雑誌の形式」が採用されたが、内容的にみれば創刊号でも高島素之の『資本論』翻訳を批判する養田論文など政治的色彩は色濃く表れていた。この二面性は、表紙のタイトル『原理日本』を挟んで上下に配置された二つのサブタイトルが象徴的に示している。上には「社会・歴史・精神・文化科学的研究・批判」とあり、目次の柱として「凝固革命思想対不断思想学術改革機関雑誌」が置かれている。

編輯発行の中心は養田であるが、その周辺の人脈を次のように記録している。

「それに就いて編輯発行人たる記者等が慶應義塾大学の奉職在学

者たる關係上、同大学の教職員出身者たる若宮卯之助氏、高橋龍雄氏、飯田忠純氏が旧『人生と表現』社同人以外より新に参加せられたのである。若宮氏は同大学の総合講座としての社会学を担当せられてをるが、最近創刊された『日本』新聞に主筆として椽大の筆を揮はれつゝあることは世間周知のところである。高橋氏は国文学の隠れたる研究者であるが、曾て高山樗牛在世時樗牛等と共に『日本主義』運動に参加せられた方である。」

若宮が主筆をつとめた新聞『日本』（一九二五年六月二五日創刊）は、政友会の実力者・小川平吉が出資した日本主義日刊新聞である。一九三五年七月一三日経営不振のため休刊となったが、同月二七日より週刊として発行された。『原理日本』とともに天皇機関説攻撃の中心的メディアであり、養田ほか原理日本社同人も数多く寄稿していた。右翼ジャーナリズム関係で重要な原理日本社同人には若宮の他に上領一郎がいる。上領は池田弘、鈴木寿雄など日本生産党関係者とともに『帝国新報』（一九〇七年十月創刊・日刊新聞）や『回天時報』（一九二六年九月創刊・四六倍判月刊誌）の編輯を行っており、両紙に養田や三井も定期執筆していた。また右翼関係では大日社の宅野田夫とのつながりから『日本第一新聞』（一九三一年一月二七日創刊、週刊新聞、一九三五年八月二〇日廃刊）や『大日』（一九三二年二月創刊・四六倍判旬刊誌）、『大日本新聞』（一九三五年一〇月八日創刊・日刊新聞）などにも同人が寄稿している。

第二号では、以下の雑誌との友好関係が示されている。

「本誌創刊に就き、同人と従来関係深かりし『日本及日本人』『国本』『日本』（新聞）『青人草』の各誌が多大の厚意を以て、それぞれ犠牲的に広告紹介を掲載せられたることを深く感謝する。」

『日本及日本人』（一九〇七年創刊・旬刊誌）は三宅雪嶺主筆で知られた総合雑誌だが、関東大震災後の再建問題から三宅雪嶺が退社し、五百木良三（政教社社主）のもと大アジア主義的色彩を強めた。三井が歌壇選者をつとめた関係から同人に併読者が多かった。

『国本』（一九二二年一月一日創刊・月刊誌）は平沼騏一郎を中心とする国本社機関誌である。『青人草』は同人の井上右近が京都で発行した同人誌であり、『原理日本』の中心的執筆者の松田福松も『批判集言』を発行していた。その他、『宣言』（人生と表現社）、『克念』（御橋義海編輯）、『耕土』（平田柏楊個人雑誌）などが創刊期の同人関連雑誌である。いずれにせよ、右翼ジャーナリズムにおける人的ネットワークは未開拓の分野であり、今後の研究が期待される。

創刊期『原理日本』の「編輯消息」には、雑誌経営の実情を伝える多くの資料が公開されており、右翼メディア研究にとつては大変貴重である。

「本誌の経営は最初編輯者に於て全部負担する計画なりしも、急に文省社主人宮尾政治氏の好意によりそれを免れ得たことは、編輯

者（蓑田胸喜・吉田要三）にとつて非常に幸であつた。同氏を紹介された文学士伊藤千眞三氏、並に本誌発刊につき御配慮を辱ふした同人諸氏に厚く感謝すると共に御諒承を請ふ。」（創刊号）

共同編輯者の吉田要三は創刊号に「社会科学研究の錯誤誤信」で森戸辰男批判を行っているが、第二号からは編輯兼発行人は蓑田胸喜のみになっている。創刊号の定価は二〇銭だが、第三号（一九二六年一月号）は増頁のため三十銭となり、文省堂が発行から手を引いた第四号では再び二〇銭に戻っている。蓑田による雑誌経営の試行錯誤がうかがえる。執筆陣や購読者の募集だけでなく広告にも蓑田の人的ネットワークが使われていた。創刊期の裏表紙広告を丸善株式会社三田出張所が出稿しているのは、蓑田が慶應義塾大学予科教授だったためだろう。

「本誌創刊記念講演会を発行当日慶應義塾大学七五番教室に於て挙行了。廣瀬、若宮、飯田、蓑田の四同人出演し熱心なる共鳴者を得た。」（第二号）

『原理日本』の主要同人の意気込みは、第三号（一九二六年一月号）の「絶叫呼応録」で表明されている。ここでは、三井甲之のものだけ一部引用しておきたい。創刊時から「東京帝大へ砲火集中の策戦」が三井の念頭にあつたことがわかる。

『日本及日本人』と『国本』との新年号へかゝねばなりませんので五日頃まで『親鸞』に手がつけれられません。（略）やうやく

「共産主義」も問題になり機熟しました。こゝで「東京帝大」へ砲火集中の策戦が成功すべく事情が進みさうに思ひます。下らぬコマカイ仕事は人にやらせておき根本を統御すべく「原理日本」を……やりすゝめませう。いづれ各方面の仕事をまとめて有効に組織すべく愚弟も北海道で『北日本』を創刊（「」原稿をかゝねばなぢず、コレカラシバラク戦争デス。（二二、四）」

一方、第五号（一九二六年三月号）「編輯消息」に『原理日本』創刊に賛意を寄せた著名人のリストが掲げられている。帝大文学部教授では東洋哲学の宇野哲人、西洋古代史の村川堅固の名前が見られる。

「尚同村川堅固博士、宇野哲人博士、田中義能博士、石橋智信博士、早稲田大学教授中村半次郎氏、東北帝国大学法文学部研究室服部英太郎氏、第五高等学校教授高橋良人氏、山形高等学校教授柳原吉次氏其他無数の諸氏より新年以来賛意と激励とを賜り、また日本大学教授赤神良讓氏が氏の『社会学評論』（創刊号）に本誌を紹介されたことをここに一括して謝す。」

発行・発売で文省社と決別したため、第四号以後は蓑田個人が編輯から發送までの業務を担っていた。第五号「編輯雜記」には、その苦勞が綴られている。個人会計のため、誌代領収も雜誌發送をもつて代えるとしている。

「また誌代未納の方へは送本紙に「乞購読」と捺印致すべきにっ

き誌代何卒御納入ありたく、若し購読の御意志なき場合にはそのまゝ後返本ありたし。いふまでもなく本社は押売をなさんとするものではない。」

第六号（一九二六年四月号）「短歌欄」で蓑田は大学教師と編輯者を兼ねた苦勞を「採点と編輯」と題して詠っている。

「かゝなべて七日余りは夜も昼も 答案をしらべたり二千近くの機械的作業に近くはさげがたし かくも多くを一度に見れば及落のまた一生のわかれめとなることあらんと思へばかしこし さまぐの事情あらもあらはれし結果につきて定むるほかなし 訴へくるものもあれど訴ふるに由なくもだへくるしめるもあらん それら一々顧る由なければあらはれし結果につきて定むる外なし いまの世の大量生産といふことをつくづく感じぬ採点しつゝ 現在の学校教育試験制度の欠陥を痛感す されどすべなし こゝに新聞雜誌の任あり また協会結社の任あり そを補ふべき あゝされど学校は増し知識は広まりゆけど思想はみだるゝ われらこゝにもだ ありがたく社を結びこのすりぶみによりて叫ぶ ひろき世にかくれひそみてもだへつゝ国をうれふるはらからよたて 採点ををはりもあへず編輯にとりかゝりたり息つくまもなく 学校の勤務と雜誌の経営に原稿をかくひまもなかりき 日一日おくるゝ編輯をまへにしてあはただしくも原稿をかきたり ひとむきにつとめんとすれどはかどらず もどかしきかな時はすぎゆく ありがたきみたよりいたゞけどわ

が思ひかへすひまなしおしはかりたまへ 辛じて編輯を終へ頁をば  
かぞへて心やちつきぬ 編輯はをはりたれども校正にまたひま  
どりて 発行おくれむ」

さらに同号「編輯消息」には次のように書いてある。

「本号もまた学年試験等のために甚だしく発行遅延となりたる  
を陳謝す。これは一月創刊当時に於て後れをりたるとまた前発売  
所文省社よりの引次等の事情ありたるためでもあるが、記者の努力  
足らざるを顧みて慚愧に堪へない。しかしかくなりては到底挽回致  
し難きにつき七八月号を合併号として刊行し、九月号よりは前月中  
に發送し得るやうにする積りである。」

創刊期の休刊が八月と二月で繰り返されているのは、七月と  
一月中旬は蓑田が学期試験の採点のため編輯の時間がないたためであ  
る。創刊期には発行の遅れが目立ち、「毎月一日発行」もほとんど  
実行できなかった。第七号（一九二六年五月）「詩歌欄」に寄せた  
蓑田の歌「更け行く夜の思ひ」から、一部引用しておきたい。

（前略）更ける夜のしづけさをやぶり近かまりて 遠くきえゆ  
く電車のひびきよ くにたみの思ひ思ひのわざについきとなむ世界  
よかなしにぎはし 「名もなき民われらの力あつまりて くにのい  
のちとなると信ぜむ」 われにかへり ふとうちあふぐ硝子窓に淡  
き月がけひところ見ゆ」

こうした編輯の苦勞よりも、あるいは財政的な困難の方が悩みの

種だったろう。第七号「編輯消息」では、毎号の赤字を次のように  
報告している。

「本誌創刊号以来毎号欠損を生じ居候。それには経営上の経験技  
能なきため失策誤算を生ぜしめたることも有之候へども、本誌の性  
質と一般出版界の不景気等のこともあり購読者増加致さず、現在購  
読会員のい納入誌代にては到底出版費を償ひ難く、同人特志家諸氏  
の補給寄付と印刷所の好意とにより辛じて経営を続け来居候仕末に  
御産候。就いては此の状態の上永統致候ては、非力ながら発行者  
に於ても物心を傾倒致し参り候本誌も継続の見込立ち不申、経営方  
針につき何等か他の方法を講ぜざる可からず候。この点に就き在京  
同人同志と計り次号に於て御相談申上候が、各地同人同志の御策勵  
を願上候。」

こうした経済的困難を説明するために、第八号（一九二六年六月  
号）では「経営状態報告」と「維持費義捐者募集」が行われている。  
市販雑誌が収支報告を載せるのは、めずらしく貴重である。それに  
よると、創刊第三号までは、収入二七二円四〇銭に対して支出経費  
が二倍弱の五百七円八〇銭で、半年間で二百一七円四〇銭の赤字を  
抱え込んでいる。そのため、頁数を削減して経費を切り詰めてい  
るが、なお赤字が続くため「維持費義捐者」募集となった。

「今後本誌を三二頁に限定し発行部数千五百とするも三、五月号  
の例の如く約百二〇円を要し部数を千とするも猶百円を要し候。然

るに現在の直接購読者は二百七〇名、その誌代は月五四円書店其他を通じての売上高は二十円乃至三〇円にて合計約八〇円位が毎月の収入にて今後三二頁千部発行印刷費百円を継続するも猶月々二〇円の損失と相成候。」

定期購読者二七〇名、書店購入者が二〇〇名から三〇〇名だったことがわかる。いずれにせよ、経営は苦しく蓑田本人は原稿料もなく、自腹を切つて刊行を続けていた。

「発行者個人は全然無資力無余裕の薄給生活者にて、本誌を直接発行するに至候以後は原稿料稼も出来兼候状態に御座候。」

第九号（一九二六年七月号）によれば、維持費義捐を訴えた効果もあり、この号で初めて約九五円の黒字を計上している。最大の義捐者は大地主たる三井甲之で、四月に五〇円、五月に三〇円、以後も毎月維持費二〇円（十円）を振り込んでいる。

会計報告は第一〇号、第二三三号、第一四号、第一五号、第一七号、第二〇号、第二二一號、第二三三號、第二四号、第二五号、第二七号、第三〇号、第三二二號と公開されているが、雑誌発行費用を購読料でまかなうことは出来ず、義捐の維持費によつて運営していたことがわかる。第一三三號（一九二七年二月号）の場合、正味三六頁九七五部を印刷した二月号には八五円七八銭かかったが、「誌代及売上」四七円八〇銭、「維持費納入」四四円五〇銭となつている（第一五号・一九二七年三月）。財政が安定してくるのは、蓑田訳のカール・

ムース『唯物史観の哲学的經濟学的基礎』（精神科学叢書第一編、発行Ⅱ原理日本社、発売Ⅱ東正党・一九二七年）や三井甲之『詩集・祖国礼拝』（原理日本社・一九二七年）などの売上金が入ってくる一九二八年以後である。第二四号（一九二六年二月号）の会計報告では、『原理日本』の誌代収入七四円一〇銭に対し、ムース訳本が九四円二六銭、三井詩集が円三〇銭の売上となつており、本誌発行費用八一円三〇銭（七百部）の赤字を大きく補填している。

第一六号（一九二七年四月号）は蓑田が学年末の多忙のため、松田福松が編輯している。松田は第一八号も編輯しているが、第二〇号（一九二七年九月号）以後、蓑田の教え子である慶應精神科学研究会の瀧口堯（第二〇号）、水野龍介（第二六号―一九二八年四月）、大塚英雄（第二七号―一九二八年五月）、第三九号―一九二九年六月、第四〇号―同年七月、第四四号―同年十二月）が編輯を手伝っている。第一六号には「会員名簿訂正」と「新会員」の住所が掲載されており、第一四号（一九二七年二月号）に会員名簿が同封されていたことがわかる。市販されているとはいえ、ほとんど同人誌の域を出なかつたことを示している。

いずれにせよ、維持費振込や単行本売上による財政安定によつて、第二七号（一九二八年五月号）では百五八円二二銭の繰越金を残すまでになり、ようやく新聞紙法への登録変更が発表された。新聞紙法の登録には、月刊誌の場合、保証金として一千円の納入が必要だつ

た(第一二条)。第三一号(一九二八年九月号)で新聞紙法による発行予告が行われ、九月一五日発行の第三二号(同年一〇月号)から実行された。この登録変更は、原理日本社の組織化とも密接にかかわっていた。

「本誌の現実的進出の条件具備と相前後して、青人草社並びに原理日本社の根幹たる人生と表現社の再組織として『しきしまのみち会』が新に結成せられ申候。」(第三二号)

新聞紙法による創刊号である第三二号には『しきしまのみち会』宣言綱領会則」が掲載されている。

## ② 展開期(第三二号—第一六〇号)

新聞紙法への登録変更により「今後は自由に時事評論實際政策の提唱も可能」(第三二号)となった第三三号は、「東大赤化思想批判号」(創刊三周年記念号)である。いよいよ、『原理日本』による思想戦の火蓋が切って落とされた。

会計報告は第三三号、第三七号(一九二九年四月号)、第四一号(同年八月号)、第四四号(同年一二月号)と行われているが、「最近各地同志の御協力により誌友増加致居候」(第三三号)とあるように、激越な帝大批判が経済的にも一応成功したことがわかる。また、養田の新著『独露の思想文化とマルクス・レーニン主義』(一九二八年)が大学キャンパスの共産主義ブームにも煽られて、予想外

の成功を収めたことも重要である。

「拙著『独露の思想文化とマルクス・レーニン主義』発行普及に就は特に岐阜県庁工場課長伊藤爽哉、同視学官中村亀蔵、文部省会計課長木村正義、松本市市長小里頼水、大牟田市三井工業学校校長神作濱吉、台湾総督府坂口主税、露西亞通信社亀井秀雄、東京猿渡末熊、水戸市渋谷無庵氏其他同人諸兄は一々不申上候が御厚志御尽力を賜り幾重にも御礼申上候同書は既に六版の発行更に近く十版迄印刷の予定に有之此上とも普及に御協力被下度候」(第三五号)

第三七号掲載の広告によれば、『独露の思想文化とマルクス・レーニン主義』は「文部省専門学務局の三百部申込」「近々三ヶ月にして第十版発行」とある。同号の会計報告によると、五ヶ月間の同書売上は一四二五円五四銭に達していた。それは『原理日本』一千部を約一五ヶ月発行できる金額である。この結果、原理日本社の財政基盤はなかり改善された。第三五号の「編輯消息」の横には「本社移転広告」が掲載されている。原理日本社は養田自宅を出て、芝区三田四国町二七番地(慶應義塾下、三田英語学校筋向)に事務所を構えるまでになった(一九三二年四月、養田の慶應予科辞職、国土館専門学校就職により世田谷若林二七八に移転(第六八号))。第四五号(一九三〇年一月号)の広告によれば、『独露の思想文化とマルクス・レーニン主義』は、「内務省より三百部」「海軍省より一千部買上あり第十一版発行」と売れつづけた。最初のパフレット(講演速記)

の大成が、その後の原理日本社のメディア戦略を決定づけたと言っても間違いはあるまい。『原理日本』に原稿を書き、それをまとめてパンフレットを作成し、さらに編輯して単行本化するサイクルが動き始めた。以後、三井甲之著『東京帝国大学法学部赤化教授対「しきしまのみち」学術的解析』、松田福松編『大学より発源する日本赤化思想運動の現状と其学術的折伏』など、同形式のパンフレットが続々と原理日本社から刊行された。

こうした帝大教授攻撃の著作物とならんで、『原理日本』誌上で盛んに宣伝された「たなすゑのみち」についても触れておきたい。三井甲之は一九二九年頃から「手かざし療治」の普及活動を開始していた。『原理日本』では第四二号（一九二八年一〇月号）に瀧口堯「手のひら療治伊豆実修会」が掲載され、蓑田も「編輯消息」で次のように紹介している。

『日本及日本人』の併読者諸兄は既に御熟知の事と存候が、本誌八月号『しきしまのみち通信』にて三井氏が申され候『シキシマノミチとしてのタナスエノミチ（テノヒラレウヂ）』は、実業の日本等に見え候西式触手療法の如きと同一原理のものに候が、先輩同志にて現甲府中学校長江口俊博先生が古来の我が神道の民間信仰治療に潜み伝わりし方法に新工夫を加へて、昨年以來創始公開簡易化して普及せられ来りしものを、三井氏がシキシマノミチ実修の詩人的敏感、宗教的熱誠と、またヴントの生理的心理学の研鑽に基く自然・

精神両科学の内外最近の研究をも総撰す飽くなき学術的探求心と、更に現下極迫の祖国の動乱的危機に対する切実なる現実的關心とよりの合成的努力によつて、之を『国民宗教儀礼としての明治天皇御製拝誦』の精神原理の下に江口先生と協力展開せしめられ来りつゝあるものに有之」（第四二号）

『原理日本』誌上にも三井甲之著『手のひら療治——しきしまのみちのたなすゑのみち』（アルス・一九三〇年）の広告が掲載されている。「第五十号記念号」（一九三〇年六月号）の表紙には「手かざし」の写真が登場し、江口俊博・三井甲之「たなすゑのみちの会宣言」、松田福松「英国に於ける手のひら療治 研究資料」など特集が組まれた。この号の巻頭論文が蓑田胸喜「武力戦の前衛戦としての思想戦——美濃部博士の統帥権滅却思想を中心として」であれば、当時としても同人以外の知識人が、その「表現における越境と混淆」に違和感を抱いたであろうことも想像に難くない。その意味でも、思想攻撃に有効なメディアは『原理日本』そのものより、パンフレットや単行本であったはずである。

この展開期の「編輯消息」には、『大日』、『回天時報』、日刊『日本』、週刊『日本』、『生命線』、新聞『大満蒙』、『日本第一新聞』、『帝国新報』、『精神科学』、『愛国新聞』、『維新』、『皇道』、『学生生活』（東京帝大文化科学研究会）、『反共情報』など右翼ジャーナリズム関連の消息記事が多数見受けられる。なお、『原理日本』の有

力な執筆者であった木村卯之（女子商業学校教諭）の追悼号（第八六号―一九三四年四月）には、木村との関係を軸に蕨田の興国同志会時代を回想した「追憶」の文章がある。さらに、新聞『日本』主筆・若宮卯之助の追悼文（第一二二号―一九三八年六月）には以下の文章が掲載されている。

「機関説排撃の思想戦最も強化を要したる昭和十年八月『日本』が突如休刊となりました際我等同人が意見を異にし、袂を別ちましたことは遺憾でありましたが、共産主義や法学万能思想の如きに対しては終始最も勇敢に論陣を張られましたことを回顧しその独自の研究を整理完成する暇なくして永眠されましたことを惜しみ、左に本誌に寄稿されました論文題目を掲げ、謹んで哀悼の意を表します。」

『日本』と決別して以後、『原理日本』同人は『帝国新報』（社長・池田弘、主筆・香渡信、社説担当・上領一郎）に活動の比重を移している。

右翼ジャーナリズム以外では、岩波書店との関係など興味深い記事も存在する。蕨田の編輯を手伝って「編輯消息」も執筆した大塚英雄は、第七〇号（一九三二年七月号）に岩波書店への就職挨拶状を載せている通り、一九三二年六月同書店に入った。なお、蕨田と岩波茂雄との会談について、第九二号（一九三四年一月号）に次の記事がある（第一三二号―一九三九年四月も参照）。

「岩波書店の『松蔭全集』の発行に就いては先年同店小売部に入

られた大塚英雄兄が特に努力されてをりまして店主岩波茂雄氏の所謂出版道徳には敬意を表し同書の発行普及の重大意義を思ひ、小生も早速購読を申込み『講孟割記』等をも含む第一巻の配本も既を受けたのでありますが、それにつけ前号（「岩波茂雄氏の驕慢叛逆思想」）に批判しました岩波氏の態度は全く無思想といふべく同号を同氏に書信をも添へて送達しました処早速返信あり、同氏は三井氏と一高大学にて旧知友人関係でもあり三人にての会見の申込あり昨夜それを果したのでありますが、乍遺憾同氏の人間的率直は認むべきもその思想的無信念は批判したる通りでありまして、我等は所信意志の貫徹に向つて進む外ありません。」

蕨田は津田左右吉裁判において、津田の著書出版人として岩波茂雄も告訴している。しかし、岩波茂雄は敗戦後、蕨田の自決の報をきくと「やはり本物であったか」と頷き、この「自己の信念に殉じた純粹な右翼主義者」に香典を贈った。彼の靈前に金一封を捧げた唯一の出版人であった。

『原理日本』本誌の紙幅は満洲事変後に急増する。満洲事変に際して原理日本社は「出征皇軍慰問冊子義捐金募集」を開始し、『明治天皇御製と軍人勅諭の宗教』を発行している（収支決算報告は第六八号―一九三二年五月）。このあたりから軍部と直接的な交渉が始まったと考えられる。

「出征皇軍慰問冊子発行に就いては、シキシマノミチ会より陸海



軍恤兵部其他に別項報告の如く一万一千数百部の献呈を了しましたが、別に陸軍恤兵部にて八万五千部の実費購入注文あり、四月五日一〇日にその納入も了しました次第にて陸軍の方は現出征軍人全部に頒たれるに至りましたことを御喜び下さい。」(第六八号)

原理日本社と陸軍機密費との関係について諸説あるところだが、直接的な資金援助はともかく、八・五万部の実費購入というだけでも相当な額の資金が原理日本社に流れ込んだはずである。この第六八号「収支決算報告」以後、『原理日本』で会計報告が行われることはなかった。ただし、雑誌代金の未納問題は引き続き深刻だったようで、第七三号(一九三二年一月号)には「誌代未納一千数百円にのぼり、経営責任者たる小生も一身上の不如意の上に年来の私的係累重圧し来り」と窮状を訴え、購読料の納入を呼びかけている。第七七号(一九三三年六月号)によると、財政基盤強化のため「本社維新発展賛助寄付」が募集されている。大口の寄附者は中山忠直(百円)、緒方照雄(二百円)であり、総額四一一円が報告されている。

一九三五年十一月号で『原理日本』は第百号を迎えた。この特大号(一九二頁・定価八〇銭)には、創刊号から第九九号までの「主要論文総目次」、「同人著書目録」が付いている。第一〇一号(一九三六年一月号)より、従来の普通号三二頁二十銭を増頁して八〇頁三十銭に値上げを宣言している。しかし、毎号八〇頁を維持するこ

とはできず、第一〇八号(一九三六年一〇月号)より六四頁二五銭に再改訂された。定価三十銭に再値上げされたのは第一二九号(一九三九年二月号)である。

第一一五号(一九三七年九月号)は、蓑田旅行中のため「編輯消息」を斎藤隆而が執筆している(第一一九号―一九三九年二月も同じ)。その後、斎藤とともに蓑田の編輯を補佐した滝口堯の「編輯消息」執筆が増えている。ちょうど蓑田が『学術維新』『国家と大学』『国防哲学』と著作を次々に物していく時期にあたる。執筆の多忙によると推察できる。

蓑田は一九三七年末より国民精神総動員運動中央連盟の社会風潮調査委員に任命されている(第一二〇号―一九三八年四月参照)。だが、蓑田にとって国民精神総動員運動は結局、失望に終わった。原理日本社の運動が「攻撃」運動であり「建設」運動でなかったことも一因だろう。

「最近政府に於いて計画中の「国家総動員聯盟」にしても、「国体明徴」を至心信樂してこの帝大学風と共に大新聞大雑誌の論調の改革を実現し得ないやうでは、失敗に終った国民精神総動員運動の轍を踏むに至るべきことが憂慮せらるゝのでありませう。」(第一二八号―一九三九年一月)

③ 終刊期(第一五〇号から第一八五号)

『原理日本』は「第百五十号特輯」（一九四一年二月号）を特価五〇銭で刊行した。しかし、この時期から『原理日本』の活動は衰退を迎える。新たに叩くべき自由主義者は少なく、民政党もやがて新体制運動のなかで解党する。養田が攻撃すべき思想敵は、近衛文麿ブレインの昭和研究会、海軍の思想戦ブレインとなった京都学派、岸信介など統制経済を進める革新官僚へとシフトしていった。それは、戦争と平和をめぐるイデオロギー闘争ではなく、戦争協力をめぐる路線対立の様相を帯びざるを得ない。つまり、『原理日本』は、よりいっそう権力中枢に敵を求めていくことになり、攻撃の勢いは弱まっていった。さらに日米開戦段階になり強大な外敵に直面すると、『原理日本』の国内思想戦はますます困難になっていった。

当然ながら、提携する右翼雑誌も限定されてくる。ちなみに、『原理日本』が批判した経済新体制の文化版である「出版新体制」の出現により、第一五四号（一九四一年七月号）の奥付から「取次店 東京堂・東海堂・北隆館・大東館」は、「配給元 日本出版配給株式会社」に変わる。また日本出版文化協会の設立により、印刷用紙が割り当てられ、養田の著作も十分な部数を発行することはできなくなっていた。

こうした中で日米開戦後、『原理日本』の誌面は「歌学雑誌」への回帰を示している。その象徴が、養田の長詩「神曲日本」（第一六二号—一九四二年二月号）といえよう。

「光は東より！ 遠きいにしへゆ 西の国びとの こひのみあく  
がれし 希望の言葉、いま 歴史現実となりぬ。」

（中略）

現人神我大君の 大御言葉の 言霊の 厳かしき 大御しらべ  
神言よりぞ、全世界の 国とふ国の 民とふ民の 心の底ひ  
魂の奥がの 悶え苦しみ つめたき思ひ そをみなもとゆ  
いてらし いとかす あたゝかき 天津日の光、大御稜威は、  
輝き出づ。

山川も 大海原も 久方の天津御空も 神ながら諸共に つか  
へまつらむ、青人草 み民われら 醜の御盾と 海行かば水つ  
く屍 山行かば草むす屍 空行かば散る桜花 大君のへにこそ  
死なぬ かへりみはせじ、と

（中略）

あゝ 人生の悲劇は 宇宙の歓喜、— 世界史の行進 さなが  
ら 国体の稜威をかなづ 神曲日本を、 神曲日本を。」

この掲載号の表紙には養田論文「神聖国家永久国防論」とともに「大東亜戦争詩歌集」が並び、中央に三井の「歌壇評論」が置かれている。翌三月号（第一六三号）にも養田の「祝詞 中今」、長詩「二月一日」が並び、表紙には「戦捷祝賀詩集」が刷り込まれている。この号に養田署名の「編輯消息」はない。

国内に敵が見出し難くなると、『原理日本』のポルテージはますます

す低下していった。三井は中央協力会議の山梨県代議員となり、蓑田も一緒に総会委員会を傍聴している（第一七〇号―一九四二年一〇月）。本居宣長や源実朝、西行などに関する評論は、それ以前では考えられなかったことである。三井自身も第一六五号（一九四二年五月号）の「消息」のように、もっぱら斎藤茂吉やアララギ派を攻撃しており、「学術維新」から「和歌維新」に関心を移したように見える。三井が原理日本社から『和歌維新——和歌技術の書』を刊行したのは、一九四二年三月である。

一九四二年夏以後になると、国語国字変革問題の「国語問題特輯」（第一六九号―一九四二年九月）や「愛国百人一首選定取扱」（第一七三号―一九四三年一月）に議論は向かった。往年の思想摘発を想起させる記事は、第一六九号（一九四二年九月号）の「編集消息」ぐらいであろう。後に「横浜事件」（神奈川県特高警察がでっち上げた言論弾圧事件）の引き金となる『改造』の細川嘉六論文を蓑田はいち早く批判している。

「然しながら『改造』九月号に八月号から連載されてをります細川嘉六氏の『世界史の動向と日本』といふ論文はその露骨なる全面的ソ聯讚美論がマルクス主義唯物史観の無条件信奉態度から執筆されたもので、看過すべからざる凶兆であり、改めて批判したいと思ひます。」

「大東亜戦争一周年」と表紙に刷り込まれた第一七二号（一九四

二年一二月号）「編輯消息」の末尾に、瀧口堯が次のように書いている。

「蓑田氏健康を損ひをられ小生代つて本消息を認めましたが、既に快復されました故御放念下さい。」

確かに、次の第一七三号（一九四三年一月）から蓑田は「編輯消息」に復帰し、第一七四号（同年二月号）の巻頭には「原理日本社研究綱領」が掲げられている。ここに至って殊更に「研究」を宣言しなければならぬほど追い込まれていたといえよう。その附言の末尾は次のように結ばれている。

「故に用紙配給及出版事業の統制の如きも、『天朝の御学風』に従ひまつるべき国體原理による思想内容の価値批判を伴はざる一律形式に流れ、それが一定の限界を越ゆる場合には国體の威厳を損じ反国體的行動を発生せしむる虞あるべきことを官民共に警戒すべきである。」

『原理日本』も用紙配給によって刊行が困難になっていたことが判る。もともと、同号「編輯消息」で蓑田は研究綱領の目的を「本社の伝統精神と進路とを確認」するためと言う。いずれにせよ、その姿勢が前向きでないことは否定しがたい。

第一七七号（一九四三年五月号）では、次の社告が掲げられている。

「用紙数量節減のため本誌次号より書店販売を中止しますから一

般購読者は本社直接申込の方法をとられたし。

ここで最終的に『原理日本』は同人以外への影響力を失った。この第一七七号で実質的に養田は編輯から降りている。第一七八号（一九四三年六月号）では、阿部隆一が編輯を担当している。

「御心配をいたゞいてをります養田胸喜氏の建康は未だ十分とは申しかねるやうの状態にて本号は記者が編輯に当りました次第ですが、同人一同微力を傾注時局に即応し本社の伝統的任務遂行に当ります覚悟を申し添へさせていただきます。」

従来、養田の代役として同欄を執筆した瀧口堯も四月中旬に脳溢血に倒れたことが付記されている。そのため、『反共情報』を編輯していた齋藤隆而が『原理日本』編輯業務の一切に専心するため復帰したこと、用紙節減のため編輯が窮屈となったため論文の投稿は、場合によっては『帝国新報』の方に紹介するとも書かれている。

第一七九号（一九四三年七月号）以降に発行された七号は、すべて齋藤隆而が「編輯消息」を執筆している。瀧口が倒れて以後も編輯実務は茂木武夫と長濱栄智が行っていたようだが、第一八四号（一九四三年十二月号）「編輯消息」によると、茂木が済美中学校の国語教諭となり、長濱も学徒出陣した。こうして実質的な編輯者がいなくなったため、第一八五号（一九四四年一月号）で『原理日本』の刊行は止まった。この最終号に終刊ないし休刊の辞はないが、刊行困難を示す齋藤の記述が存在する。

「本誌編輯に關係致しをります同人すべてがそれぞれの職域を持ちつつ、帝国新報（日刊）、愛国新聞（旬刊）等へは連続寄稿致し、小生はまた不十分の健康状態をもつて国際反共聯盟の活動にも直接間接に協力致しをりますやうのことにて本誌編輯が心ならずも遅れ勝となる状態であります。」

さらに、この「編輯消息」は原理日本社と提携関係にあった帝国新報社長・池田弘の急逝も伝えている。

かくして、一九四四年一月一日をもって『原理日本』は足掛け二一〇年間の活動に幕を閉じた。組織的な分裂を繰り返して、長期的に継続刊行されることが少ない右翼雑誌の中で、『原理日本』は際立って長命な雑誌ということが出来る。

その政治的評価はともかく、昭和戦前期の右翼ジャーナリズム研究にとつて第一級資料であることは何人も否定することはできない。今後の研究が待たれる所以である。

（なお、小論は竹内洋・佐藤卓己編『養田胸喜全集』の第七巻解題を加筆修正したものである。なお、執筆にあたり、科学研究費基盤C・研究代表者・佐藤卓己「昭和戦前期における右翼雑誌のメディア学的研究」平成一五・一六年度の成果を一部利用した。）

註

- (1) 『原理日本』および蓑田胸喜・三井甲之に関する研究として、石橋一哉『文献 蓑田胸喜』胡蝶の会・一九九二年、阿南三章「蓑田胸喜小伝」『暗河』第四号（一九七四年）、石井公成「親鸞を讃仰した超国家主義者たち（一） 原理日本社の三井甲之の思想」、片山素秀「原理日本社論のために——三井甲之を中心とする覚え書き」『近代日本研究』第九卷（一九九三年三月）、塩出環「帝大肅清運動と原理日本社」『日本文化論年報』第四号（二〇〇一年）、同「蓑田胸喜と原理日本社」『国際文化学』第九号（二〇〇三年）がある。本稿の執筆にあたり、片山論文から大きな示唆を受けた。近年の論壇での評価は立花隆「狂信右翼・蓑田胸喜と瀧川事件」『文藝春秋』二〇〇三年一月号、竹内洋「丸山眞男と蓑田胸喜」『諸君！』二〇〇四年三月号を参照。
- (2) そうした研究状況に鑑み、竹内洋・佐藤卓己他編『蓑田胸喜全集』（柏書房・二〇〇四年）の第七巻に、『原理日本』の全号の目次、編輯消息を収録した。完全ではないが比較的まとまった所蔵先は東京大学大学院法学研究科附属近代日本法政史センター、東京大学総合図書館、慶應大学三田メディアセンター、および国立国会図書館である。
- (3) 最後の第一八五号（一九四四年一月号）まで、未刊行の第六三号（一九三一年九月号）をのぞき一八四冊が現存している。定価は何度か改訂されたが、第一〇八号（一九三六年一〇月号）以降の普通号は二五銭となり、第一二九号（一九三九年二月号）から三〇銭で終刊をむかえた。
- (4) ラジオ時代のメディア状況については、拙著『（キング）の時代——国民大衆雑誌の公共性』（岩波書店・二〇〇二年）を参照。
- (5) 日本ラジオ史の第一人者である竹山昭子の『ラジオの時代——ラジオは茶の間の主役だった』（世界思想社・二〇〇二年）は、『玉音放送』（晩聲社、一九八九年）、『戦争と放送』（社会思想社・一九九四年）と三部作をなす決定版である。世論の「歴史心理学」を志向した南博十社会心理研究所編『昭和文化』『続・昭和文化』（勁草書房・一九八七年・一九九〇年）収録論文が発点となっており、ファシズム世論形成の文化装置としてラジオの機能が実証的に分析されている。さらに世論を形成する社会関係である公共性の視点から、ラジオ史を開拓した津金澤聡廣「放送の公共性」に関する論議の歴史と展望（同『現代日本メディア史の研究』ミネルヴァ書房・一九九八年所収）の問題意識も同様であろう。
- こうした先行研究を踏まえて、ラジオをより広範な音声メディア環境に位置づけた吉見俊哉『「声」の資本主義——電話・ラジオ・蓄音機の社会史』（講談社メチエ・一九九五年）、近代詩運動がラジオの戦争詩朗読に絡め取られていくプロセスを描いた坪井秀人『声の祝祭——日本近代詩と戦争』（名古屋大学出版会・一九九七年）、ラジオ体操による身体の規律化を分析した黒田勇『ラジオ体操の誕生』（青弓社・一九九九年）、浪花節放送とファシズムの国民心性を考察した兵藤裕己『《声》の国民国家・日本』（NHKブックス・二〇〇〇年）、あるいは英語講座を通じて大衆的教養の国民化に切り込んだ山口誠『英語講座の誕生——メディアと教養が社会

う近代日本』(講談社メチエ・二〇〇二年)など、ほとんどのラジオ史研究はファシズム文化の問題系を構成している。直接のファシズム研究として、戦時日本の海外プロパガンダ放送などの研究も北山節郎『全記録ラジオ・トウキョウー戦時体制下日本の対外放送』(田畑書店・一九八八年)、『ピース・トーカー日米電波戦争』(ゆまに書房・一九九六年)も存在している。さらに情報公開の進展によって、アメリカ側資料を駆使した本格的な戦時期の対日放送分析である山本武利『ブラック・プロパガンダ』(岩波書店・二〇〇二年)も出現した。今や、ラジオ「研究」もまた国境を越えている。

- (6) Brecht, B., *Der Rundfunk als Kommunikationsapparat* (1932) in: *Gesammelte Werke* (Band 10) (石黒英男訳「コミュニケーション装置としてのラジオ」、『ブレヒトの映画・映画論』河出書房新社・一九七三年)
- (7) 第一次大戦後の「新しいナショナリズム」については、特に成田龍一「一九二〇年代、民衆文化とナショナリズム」『近代都市空間の文化経験』(岩波書店・二〇〇三年)を参照。
- (8) 内務省警保局「昭和十年中に於ける出版警察概観」『出版警察概観』(復刻版・竜溪書舎・一九八一年)、一一六頁。
- (9) 「昭和七年中に於ける出版警察概観」二六三頁、「秘 昭和九年中に於ける出版警察概観」二二〇頁。
- (10) 原理日本社における三井の重要性を指摘した論考としては、片山素秀と塩出環の前掲論文がある。塩出は原理日本のイデオロギーで蓑田より三

井を重視するが、そうした視点はすでに片山の前掲論文にもある。片山の優れた先行研究になぜ言及しないの不可解である。

- (11) 小松茂夫「近代日本思想における伝統主義の問題」『歴史と哲学との対話』平凡社・一九七四年、七三―七四頁。
- (12) 川村湊「津田左右吉、否定の史学」『文芸』一九八七年秋季号。
- (13) 村井紀「滅亡の言語空間―民族・国家・口承性」ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典』新曜社・一九九九年、二五八頁、二七五―二八一頁。
- (14) 瀧川事件については、松尾尊允「京都大学瀧川事件」『瀧川事件記録と資料』世界思想社・二〇〇一年、美濃部天皇機関説問題については小山常実『天皇機関説と国民教育』アカデミア出版会・一九八九年、河合栄治郎批判については竹内洋『大学という病―東大紛擾と教授群像』中央公論新社・二〇〇一年などを参照。
- (15) 石橋、前掲書、一〇〇頁。
- (16) 塩出環「蓑田胸喜と原理日本社」、一八七頁など参照。